

その位にあらずともその事を行ひ、自家の米塩を憂えずして国家の経綸に志す者は浪人なり。則ち浪人は政府または人民より頼まるるに非ずして、自ら好んで天下のことに当たる。

昭和二十九年十一月九日の自民党総裁選で選出直後に佐藤栄作総裁から、同志会の一枚岩の団結した支援に対して寄稿された揮毫である。

団結
為同志会
菅野 昌

自由民主党同志会新聞

発行人
小笠原 浩之

定期発行日(年4回)1・4・7・10月の30日
〒100-0014東京都千代田区永田町1-11-4
電話 03(3580)7775 FAX 03(3580)5777
購読料1カ年 2,500円

五輪開催と共に観光産業の活性化に不可欠な「カジノ構想」



名誉会長 最高顧問
福田 晃丈

アベノミクス「成長戦略」の起爆剤

カジノ構想は、アベノミクス「第3の矢」の成長戦略に弾みをつける起爆剤になり得る。

すなわち、国際観光産業振興議員連盟(通称カジノ議連)が旗振り役になり、二〇一三年十二月にカジノ解禁法(IRR基本法)を衆議院に提出したことがその理由に挙げられる。

このIRR議連は、衆参の与野党議員がずらりと並ぶ超党派議員団である。つまり集団的自衛権の憲法解釈や原発問題を巡る与野党対立とは無縁の呉越同舟の集まりなのである。

将来的に日本国内でのカジノが実現すれば、巨額な投資が見込まれるほか、観光産業を始め膨大な経済効果をもたらすことが期待される。そうした大きな展望も見込めるため、経済界からもカジノ待望論は極めて強いものがある。

だが承知のとおり、我が国でのカジノは刑法で賭博行為に該当し禁止されている。このため、まずは先のカジノ解禁法を成立させなければならぬ。

ちなみに、この法案の基本理念は「地域の創意工夫及び民間の活力を生かし国際競争力を高い魅力ある滞在型観光を実現し、地域経済の振興に寄与するとともに、適切な国の監視及び管理の下で運営される健全なカジノ施設の収益が社会に還元されることを基本とする。」とあるように「国際競争力」「滞在型観光」「地域振興」「健全」がキーワード

になつてくる。この法案を成立した上で、内閣に設置する整理推進本部主導で、賭博罪の適用を受けないための「カジノ特別法」の制定を目指す。先のIRR議連のメンバーがこう話す。「つまりカジノ法案は二段構えになつている。今回、基本法であるIRR法案が通過すれば、政府は二年内に実施法を作らなければならない」

その後に、カジノの立地場所や事業者選定などを進める段取りだ。

四年後の東京五輪を視野に

こんな状況下、既に全国各地でカジノ誘致合戦が水面下で進められている。ここで「IRR基本法」「IRR議連」等々、これまで再三登場したIRRについて説明しておきたい。IRRとは、特別複

合観光施設の略称で、カジノ施設の中に国際会議場やショッピングモール、ホテルなど合わせた複合施設を指す。過去に浮上したカジノは、単にラスベガスやマカオをモデルにした構想であった。だが、対象的に、今回のカジノ構想はIRRの名の下、アベノミクスと東京五輪を負い風にイメージを一新したのが特徴だ。

観光立国を目指し、国際会議場や見本市を狙った「IRR」の建設推進の方向に大きく動いている中で、これにカジノが融合するのだからメリットが大きい、と指摘する識者は多い。なお、カジノ議連は、前述したように超党派の議員連盟で、共産と社民を除いたすべての党から参加者があり、メンバーは206名である。顧問の面々を見よう。(続)

全国書店発売中!



総理の犯罪

明日の日本の指導者を選ぶ時
戦後日本を導いてきたリーダー達が 国のために、国民のために、何をしたか知っておくべきである。

福田 晃丈 著

定価 1,800円(税別) 発行 政界往来社

元公安調査庁担当官が語る「北」の真実

元首席公安調査官 佐藤 博行

金正恩委員長は、経済再興政策と核・ミサイル政策を進める「並進路線」で内外政策を推進！

北朝鮮は、本年（2016年）5月6日～9日

にかけて、朝鮮労働党第7回党大会を開催した。

同党の党大会は、故金日成主席時代の1980年

以来、36年振りで、金正恩が父・金正日総書記か

ら政権を委譲したときから、最も重要な政治イベ

ントとして準備したものであった。同党大会の開

催について、様々な識者は背景を分析しているが、

本来のチュチェ思想（主体思想）からすれば、二

代目の金正日に世襲すること自体に無理があった

し、三代目まで世襲することは、思想理論的には

正当性がないものであった。したがって、今回の

党大会は、金正恩が自身の立つ位置の正当性を内

外に示す上で、欠くべからざるイベントであった

と言えよう。つまり、党大会を開催しないと最高

指導者に就任していることの正当性を継承できな

いし、北朝鮮式の「民主主義」を実行したとい

ことである。

36年振りに開催した党大会では、4日間を費や

して、何をしたか。それは一言で言えば、金正恩

の絶対性の追認であり、政権の安定性を内外に示

すために開催した大会と言えよう。この絶対性の

中身は、最高指導者として「党委員長」の肩書を

新設した金正恩は、何をしても許されるとのいわ

ば免罪符を手に入れるために、それを全人民に周

知徹底させるものである。また、政権の安定性は、

「核保有国」国家の仲間入りを、全世界に現状承

認させることであり、何をしても内政的に揺るぎ

ない状態であることを意味している。

既に、分析済みであるように、朝鮮労働党が軍部を

始め全ての上位にあることを示したのである。

内政的には、同党大会の様子は、朝鮮中央テレビで

放映されているが、この放映内容は、もちろん実況中

継ではない。北朝鮮式の民主主義ルールに従い、「正

しく」編集されたものであり、大会会場と同様に、金

正恩委員長の治世成果を誇示するものがある。ただ、

特徴的な点も幾つか指摘できよう。

例えば、開会式には、金正恩は、11年末の権力承継

以来、初めて背広姿で登場したこと。冒頭、「水爆実

験」成功を声高に自画自賛し、演出通りの大会代議員

の拍手を受けながらの開会宣言は、通常のことである。

大会中に採択した「朝鮮労働党中央委員会の活動総

括」では、「祖国を東方の核大国として輝かせる」と

強調し、核・ミサイル開発政策の継続を宣言している。

自らは、外交や安全保障分野で「自衛的な核戦力を質

的、量的に強化してゆく。」「責任ある核保有国」

「先に核兵器を使わず、核拡散防止義務を履行し、世

界の非核化にの實現に努力する。」「実用衛星をさら

に多く製造し、打ち上げるべきである。」などと訴え

ている。

これらの発言は、どんなことがあっても「核・ミサ

イル開発」政策は手放さないことを全世界に宣言した

ものである。同大会が祖父・金日成時代の開催に継ぐ

ものなら、金日成が夢見て遺言した「核開発」も、ま

た、国是として継承したことの宣言である。

金日成主席を継いだ金正日党総書記は、「主席」

職名を継承しなかった。国防委員会委員長を最高位

として、その職名をつかった。この時点で、北朝鮮

の最高指導者は、前任者の職名を「故人に与える栄

誉名」として、後継者は継承しないとのルールを確

立した。「先代に礼を尽くす」の模範を作った。三

代目となった正恩も、父・金正日の職名はことごと

く継承せず、新たな職名を冠してきた。朝鮮労働党

の最高職位を新設して就任した。「朝鮮労働党委員

長」（党委員長）である。党委員長という新しい肩

書を新設することで、先代と一線を画した独自性を

出し、当代としての最高指導者としての権威をさら

に強めて、全人民並びに諸種幹部らに対して忠誠と

服従を求めるのである。政策相談相手は、妻と妹し

かないことは、周知の事実であるが、その点で注

目されていた妹は、朝鮮労働党宣伝扇動部副部長の

金与正は、党中央委員に加わった。

北朝鮮は、朝鮮労働党「党規約」に「経済建設と

核戦力建設を並進させる。」と書き込んでいる。そ

れは、金正恩委員長が3時間に及ぶ報告の中で示

したように「国家経済発展5か年戦略」がある。北

朝鮮は、金日成時代と金正日時代の前期に、経済発

展〇〇か年とのお題目を冠した「計画経済」を起案

していた。幾度の施行にもかかわらず、北朝鮮経済

は一向に改善していない。その根底には、最高指導

者が「北朝鮮経済の特殊性」を理解していないこと

に要因がある。今回の「国家経済発展5か年戦略」



に關しても、具体的な数値目標は示されていない。当該第7回党大会の開催や最近のミサイル発射回数などを見ると、金正恩委員長長の施策に一定の規律（西側諸国や周辺国が認めるか否かは別にして）があることがわかる。

金正恩は、最高指導者に絶対忠誠を求める首領制（チュチェ思想を特化したもの）を基本としつつ、先の二世代ができなかったことをやろうとしている。その思考の上で、金正恩的な「合理的な判断で国家運営」を行っているとも言えよう。内政的には、科学教育の充実や植林の奨励などをやっている。核やミサイル開発という「危険な面」に注目されるような「冒険主義の金正恩」とばかり見れないと言えよう。

核・ミサイル問題に、限定して、金正恩の頭の中を覗いて見る。西側の報道では、北朝鮮だけが行動をエスカレートさせているように書いてある。以前から指摘しているが、それを北朝鮮側からの視点で見ると「米国の脅威を受けている」ということが大前提になっている。その中で、米韓が（通常兵器が前世紀的な装備しかもっていない北朝鮮の目の前で）大規模軍事演習を始めたり、金正恩を狙う「斬首作戦」が言われると北朝鮮としてはそれに対応してくることを、考えれば、お互い様との面もある。正恩としては、核とミサイル開発を進めるだけで「国防」はそれで十分だとの考えている。金正恩は他国からの攻撃を抑止するために核兵器を持つようとしている。「安心」を手に入れた上で、経済政策に力を入れるとの考え方もいえる。その手順が正恩の思考だとすれば、核開発と経済政策を同時に進めるという「併進路線」として打ち出したと言えるのではないか。

経済政策には、人事面を見ると、本腰を入れていても見える。軍の人事は頻繁に入れ替える一方で、経

金正恩は、古典的な内政策を踏襲しつつ、金日成主席念願の核・ミサイル試射を繰り返し「大国」入りを狙う

済分野の態勢はあまり変えていない。今の経済政策を進めようとしている意思の表れで、思い付きで人事を動かしている訳でないとの根拠になるのではないか。

北朝鮮から核・ミサイル開発を放棄させるには、体制を打倒するか、日米との国交正常化や経済支援までも含めて北朝鮮の主張をすべて認めた上で核を買いとるとが、考えられるが、両方とも現実的ではない。だとすると、核を持つ北朝鮮とどう対応するかを考えるのが現実的であると言えると思う。

とはいうものの北朝鮮が飛ばすミサイルには、我が国は機敏に対処する防衛上の措置が必要であることも確かである。「併進路線」とは、別な言い方をすれば「核・ミサイル開発は絶対に放棄しない」との宣言である。それを朝鮮労働党規約に明記したということである。

それを証するように、6月22日にムスタン中距離弾道ミサイルとみられる飛翔体を発射した。2発のうち1発は、約400キロメートル飛行し、日本海に着水した。同ミサイルがムスタンとするなら、また、金正恩は現地指導した際、飛距離を意図的に短くさせたとも伝えられる。高度1423・6キロ、飛行距離約400キロ、これを対物的に換算すると約4000キロの対象物に到達したことになる。「試射は成功」と主張した上で、金正恩は「核攻撃能力を更に強化する重要な契機となった。」「太平洋作戦地帯内の米国の奴らを、全面的、現実的に攻撃できる確実な能力を持つた。」と評価した上で、「先制核攻撃能力を引き続き拡大強化し、多様な戦略攻撃兵器の開発研究

せよ」と指示したと伝えられる。

かかる北朝鮮の金正恩なりの計算した冒険主義的核・ミサイル開発及び試射に対し、米日韓国は「安全保障理事会での非難決議」「制裁」に走るが、これが金正恩の誤算である。

北朝鮮の核・ミサイル開発の水準について、特に韓国はどのように見ていたのかについて触れてみたい。一言で言えば、韓国は北朝鮮の弾道ミサイル技術力を過小評価していたのである。最近になって、ようやく「北朝鮮は既に核保有国家」と認めた。さらに「北朝鮮は世界一のミサイル特需で稼いでいる国」との認識に至った。その結果、様々な是非論はあるものの「韓国の核武装論」が声高に叫ばれるようになったのである。これに至る韓国側の分析及び認識を見てみよう。

まず、北朝鮮の核開発の現状認識から始めよう。本年1月の第4回核実験の主な目的は、弾道ミサイルに搭載できる核の小型化にあった。北朝鮮が水爆実験に成功したと主張するが、これは、米ソの核兵器開発の経緯を学んだ結果でもある。かなり軍事的専門の話になるが、米ソは水爆爆弾を完成する前段階として「増爆核分裂弾」の実験を繰り返していた。「増爆核分裂弾」は、中・長距離弾道ミサイルに搭載できる小型化された核爆弾であり、死の灰といわれる放射能の降下物資が発生しないとのメリットがあると言われる。この小型化実験のほかに、政治的背景からの焦りから実験に踏み切ったとみられる。すなわち、中国によるモランボン楽団公演取消、中朝外交の摩擦、日韓での慰安婦問題の合意、頓挫していた日中韓首脳会談の再開など、北朝鮮が蚊帳の外に置かれていることに対する焦りである。（続）

連載7 戦略国家日本の目指す道「日本人らしさ」を問う(2)

古神道にあった「神と人とのかかわり」の中に、日本人の独自性と合理性が見える

前号で宗教的に、日本は他の一神教国と違う、と触れて終わりになった。更に、続けよう。

我が国の宗教は他国の例にもれず原始宗教や儀式などから発生しているが、前号でも触れたように「契約」の概念がない。日常生活の中に「神」は介在しない。「苦しい時の神頼み」の言葉に集約されるように、日本人にとって「神は必要な時に現れるもの」であった。これは無神論という簡単な言葉に置き換えられるのは誤解である。むしろ、常に身近なもの、生活と一体化しているので、あえて神を意識する必要がなかった一との意味である。世代的には団塊世代に色濃く残っていると思うが、「あらゆるものに神が宿っている」から、日常生活的には神を意識することの必要性はなかった。

古神道、つまり、仏教が勧請される前の新道の時代、神は人間が必要な時に召還したのであった。(宗教学の講義ではないので、概論として理解されたい。)神は大きな力を持つ存在であり、大きな岩、大樹木、大樹木の集合体である山、清水などを拠点・よりしろとして存在している。

神は大きな力を持った存在であるから、誰しもが簡単に触れることはできない。したがって、神に会えるのは選ばれた人間である。例えば、村長のような人。その人が、山水沐浴し身を清める。ほかの人と違うことをし、一般人とは別の人となる。その間に、皆が共同して、神のよりしろを作る。その村に大きな樹木があれば、その木をよりしろにすべく、四方にしめ縄を張る。しめ縄の内外で、通常の場合と異なる場合を区分する。しめ縄の中には通常人は入れない。

しめ縄を張った中に、小屋を建てて置く。そこは、神と選ばれた人(村長)が一晩共に寝て共食をする場である。つまり、神の力を一夜を共にし共食することで、選ばれた人が神の力の一部を授かるのである。一夜が明け、選ばれた人は、しめ縄を超えて一般人の中に帰るが、神の力を授かっているため、簡単には、元の体には戻れない。神と共食をした目的は、神の力を授かり皆を幸せにすることであるから、神と共食をした人は、皆と共食をすることで、神から授かった力を皆に分け与える。すなわち、「なおりい」である。簡単に言えば、村長を囲んで村中で宴会を開催し、村長から盃をいただく的なことである。こうして村中が宴会している間に、役の者はしめ縄を取り外し、小屋を片付ける。では、神は？高天原(神の居住区)に帰っていただくのである。次に呼ばれるまで、神は高天原で待機している。

少々長くなったが、それが仏教が我が国に入る前の神とのかかわりである。必要な時は神頼みするが、それまでのぎりぎりのところまで人間に力で精一杯努力する一のが日本人であった。すべてのものに神が宿っていると認識しつつ、敬いながらも、人間として精一杯の務めをする。それでも苦しければ、神頼みを皆でする。このような宗教観は日本人の原点である。(続)

△一考察▽

軍事面から見た中華人民共和国を解析する

中国人気質を理解する上で、欠かせない書物がある。「資治通鑑」である。中国人の衣食の風習があったことや治世者が変わると、前治世者一族を本当の意味で根絶やしにする処刑をしたことが書いてある。同書でカバーしている時代は、紀元前500年から紀元後1000年の約1500年間である。中国は5000年の歴史と云うが、このような書物に出会うと、確かにそのとおりであると思う。この書物を紹介した人物は、日本人が交渉相手とする中国人はこのような気質の歴史を持っていることを訴えている。そして、同書物の歴史から鑑みると、中国の現政権：共産党思想による統治も、大きな波の二山であり、次の波が来るまでの歴史であると文を締めくくっている。

とは言え、現在に生きる我々日本は、今の中国と対峙しているから、中国の暴走を止める手立てを、各方面から解析することで、探らなければならない。

ここで少し方向転換をするが、隣国に「核保有国」宣言をした北朝鮮を抱える中国の核兵器に対する意識はどのようなものであるか、北朝鮮をどう見ているのか、についても触れておかなければならない。中国は、「北朝鮮は中国の地方都市」との意識が根強い。中国人が通ったところは中国の領土だと主張することからすれば、北朝鮮としても心穏やかではないし、毛沢東も金日成に批判的であったことが明らかに尚更である。毛沢東主席は、中華人民共和国の建国以前から安全保障上の観点からではなく「世界共産革命実現」の観点から核武装に固執していた。なぜなら、米軍による広島・長崎への二つだけの原爆攻撃で、中国にとって最後まで強敵であった大日本帝国を無条件降伏に追い込む上で決定打となったことに驚愕し、それが核兵器獲得への執念を持たせることになったのである。

―続―